

小児に急増する歯の形成異常や口腔機能発達不全について

福本 敏

九州大学大学院 歯学研究院 小児口腔医学分野

近年、乳歯および永久歯における歯の形成不全が急増している。これらは遺伝的背景よりも社会環境の変化によるものと考えられており、ビタミンDの不足により骨や歯の形成以上が生じている可能性が示唆されている。実際、国内の小児を対象とした調査においては、約20%の小児に歯の形成異常が認められたとの報告がある。歯の形成異常は歯蝕が進行しやすく、また咀嚼機能にも大きな影響を及ぼすため、小児に関連する様々な職種の連携により、予防的な指導とともに早期の歯科的な介入が必要となる。また、高齢者においては歯蝕や歯周病により歯の喪失や、口腔周囲の筋力の低下による咀嚼嚥下機能の喪失が問題となってきている。一方で、小児においても口腔機能の発達過程におけるこれらの障害が大きな問題として取りざたされている。歯科においては小児期における口腔機能発達の改善を目的として、「口腔機能発達不全症」という病名が定められ、これらの問題に対して保険診療の中で対応することができるようになってきた。保育園や幼稚園の現場において、なかなか食べ物を飲み込めない、あるいは食事に時間がかかるなどの問題が生じている。しかしながら、小児においてどのように口腔機能を評価するのか、また口腔機能低下による具体的な問題点などが明確になっていないのが現状である。そこで本講演では、なぜ歯の形成不全が増加しているのか、また発症を抑制するためにはどのような対策が必要であるかを整理し、予防から具体的な治療までを紹介したいと考えている。また口腔機能発達不全に関しては、評価シートの利用法や、具体的な指導方向などを明示し、早期に介入することの大切さをお話ししたいと考えている。